ペーパーレスから始める 中小企業のDX

石井健也
(株)ちばぎん総合研究所
経営コンサル第一部
コンサルタント

DX定義と現状

DXという言葉は、今や毎日のように目にする言葉になっている。DXとは「デジタルトランスフォーメーション」の略語であり、単にIT化を進めるだけでなく、業務や社会・企業・製品に新しい価値を創造していくこととされている。こう聞くと、多くの中小企業にとってかなりハードルの高いものに感じられるであろうし、実際、昨年末の政府のレポートでも9割以上の企業が十分に取り組めていないとされるなど、取り組みへの壁は大きい。しかしながら、激しい環境変化の中で、人口減少社会に入った日本の雇用環境一つとっても、その必要性については明白だろう。

ペーパーレスから始めるDX

多くの中小企業でまずやるべきことは情報のデジタル化、そしてプロセスのデジタル化であろう。これらは本格的DXの準備段階とも言えるが、多くのプロセスがデジタル化されて初めて、活用しやすいデータの収集ができ、効率化による時間創出ができ、新たな付加価値創出へとつながっていく。現在の自社の段階は、ペーパーレスの観点で見ると分かりやすい。

社内にある紙が、FAXや紙ベースで受領した書類などであれば、まず情報のデジタル化に取り組む必要がある。メールや入力フォームの活用等、なるべく情報の入り口からデジタル化できるのがベストだ。それがかなわない場合でもPDF化したうえでOCR（画像から文字を読み取りデジタル化する機能）で処理することで、入力作業時間の5割削減や入力ミスの削減を実現している企業もある。

既にデジタルデータで情報を扱えている企業でも、プロセスの中で紙として出力されているものがないだろうか。これに対しては、クラウド上でのファイル共有や、ワークフローソフトの活用等で対応していくのが一般的だが、そのいずれもポイントとなるのは、小さく始めることだ。一度に多くのプロセスを、または多くの人数で取り組むと、事前の判断事項が多くなり、導入のハードルが高くなる。導入後に不具合があれば、その後のDX全体の取り組みにも水を差しかねない。まずは、「軽微な決裁事項をクラウド上のExcelやWordファイルの中で完結させてみる」といったことでも良いだろう。小さく始めれば、クラウド料金も無料トライアルや月額千円程度の少額負担で十分であり、導入も容易だ。

まとめ

既に、物心ついたころからスマホやタブレットに触れている世代（所謂（いわゆる）Z世代）が就業し始め、消費者としても社会人としても存在感を高めつつある。世の中の価値観も変化する中で、社内・取引先・顧客どの方位をとってもDXと無関係な企業は無いように思える。

新たな取り組みには「やってみる」を繰り返すことがどうしても必要となる。これには、あらゆる手段で「やってみる」環境を作るトップの役割も大きい。ペーパーレスをきっかけに、小さな取り組みからチャレンジし、御社のDXを前進させてほしい。